

卓見 異見

ファーストスター
・ヘルスケア社長
西川久仁子



にしかわ・くにこ 86年(昭61)東大法卒、92年米スタンフォード大経営学修士修了。00年スーパーナース社長。医療に携わる人材の研修・紹介のファーストスター・ヘルスケアを10年に創業し、社長に就任。新潟県出身、50歳。

最初から突然だが、私は多様性が大好きだ。異なった価値観・物差しがたくさんあればあるほど、自分の選択肢が増える気がして楽しくなる。

この傾向は小さいころ父の仕事の都合で引越しばかりしていたこと(小学校6年間で四つの学校に行った)、特に小学校3年生から5年生の終わりまで、カナダに住んだことから始まったようだ。

ある日突然、親から「私たちはカナダのバンクーバーというところに行くのよ」と言われ、あれよあれよと言う間に引越し、現地の小学校に放り込まれた。親はアルファベットすら教えてくれ

りのところだったのでテストで満点を取ったし、音楽では「ドレミの歌」や「もみの木」など皆が知っている歌を日本語で歌い、拍手喝さいを受けた。そうしたら、皆が、英語は赤ん坊レベル、という物差しはさておき、「クニコはすごい！」と認めてくれた。

全員それぞれ「一等賞」

また、運動会でも、日本と違い実にさまざまな尺度で一等賞になれるのに驚いた。一等賞はピンクのリボンがもらえるのだが、「動きがきれいで一等賞」「リズム感が良いで一等賞」「ジャンプが高

多様性の魅力

なかったため、最初は本当に何もかもチンパンカンパンだった。

転機だったカナダ行き

日本の小学校では優等生だったが、英語が全く分からないのだから、ほとんど授業で完全に落ちこぼれてしまった。それまでの価値観がガラガラと音をたてて崩れたようだった。それでも鬱にもならず、それなりに楽しくやれたのは、カナダの人たちの物差しの多さのおかげだと思っ

ている。英語がしゃべれなくても、万国共通の算数と音楽の時間は生き生きと過ごせた。特に九九の計算は日本でやったばか

いで一等賞」など、全員がそれぞれ一つはピンクのリボンをもらえた感じだった。小学校の頃から、皆自分の強いところはこれだ、と自覚しはじめ、自信を持つことが出来るのだと思った。

日本に戻り、東京大学に進んだが「法学部に行ったのだから当然弁護士か公務員になるよね」と決めつけられることが嫌だった。そして、実際弁護士はどんな仕事をするのか、公務員は何をするのか、自分に向いているのかどうかということとは結局分からなかった。

単にまた新たなテスト(司法試験、公務員試験)を受けて突破するのではそれまでの物差しの延長である気がし、ここ

異なる物差し 選択肢増やす

はひとまず社会に出てみようという一般企業への就職活動をした。そして、東大法学部と一番かけ離れた価値観がありそうな、外資系のシティバンクに入った。ここでの最初の数年間の経験は私の仕事のベースとなるとも大切なものだが、詳細はまた別途書きたいと思う。

起業や社長業も身近に

ともかく仕事をしているうちに、自分がファイナンスや経済、ビジネスの知識をほとんど持っていないことに危機感を覚え、米国のスタンフォード大学に留学した。スタンフォードでまたいろいろ新しい価値観に出会い、とても刺激的だったが、中でも「ビジョナリー・カンパニー」という本で有名な、ジム・コリンズ教授の「Entrepreneurship(起業家精神)」の授業を受けることが出来たのは幸運だった。それまでお金を貸す側、投資する側の観点しか頭になかったが、Entrepreneurshipで、お金を借りる側、もう側の心理に初めて触れることが出来た。

また、授業では毎回成長途中の起業家、社長が来て、自分の経験を話してくれた。男性もいれば女性もいる、年齢もさまざま、分野もいろいろ、ということだ。「スーパーマン(ウーマン)でなくとも起業するんだ、社長になれるんだ」と起業や社長になることがかなり身近になった。

そしてシティバンクの後、経営コンサルティング会社を経て、看護師派遣・紹介を業とする会社の雇われ社長をやるのだが、この役目を引き受けたのも、ひとえに私が多様性を好むからに他ならない。給与は下がったが、この看護師派遣・紹介会社に行ったおかげで、今自分の好きな仕事をし、さらに人のためになっている気が持てる、という状況になれたのだから、やはり今後もたくさん物差しを持ち続けたいと思っている。

(今回は「育て上げ」ネット理事長の工藤啓氏です)